

小岩井農場と井上勝

藤井 聡

「小岩井農場」をご存じだろうか。

おそらく、乳製品の生産元としてその名をご存じの方が多いのではないかと思います。しかしそれが百年以上の歴史を持つ本州最大の規模を誇る大農場であるという事実を知る人は、必ずしも多くはないのかもしれない。かくいう筆者も、旅先で小岩井農場の資料館に訪れるまで、その事実を知る者ではなかった。しかし、その資料館に立ち寄った時、その歴史の古さや大きさ以上に筆者に衝撃を与えたものがあつた。それは、小岩井農場の誕生にかの「井上勝」が深く関わっていたという事実であつた。

「井上勝」をご存じだろうか。

「井上勝」といえば、日本の鉄道の父とも呼ばれる、日本の近代土木における文字通りの草分けである。幕末に伊藤博文ら五人と共に英国に渡り、他の四人が政治を学ぶ中で一人、近代土木技術の基礎を学んだ。そして、明治元年に帰国して以降、新橋、横浜間の鉄道開通をはじめ、東海道線や東北本線など、数々の鉄道工事で陣頭指揮にあたったのであつた。

さて、その井上勝が、内閣鉄道局長官であつ

た明治21年、東北本線工事視察のために岩手を訪れた際、岩手山南山ろくの広大な荒地を打ち眺めて、驚くともにある感慨にとらわれ、次のように述べたと伝えられている。

「これまで、十数年、鉄道敷設の事業に嘗々と携わつてきた。そして、その間、わが国の文明開化のためと言ひながら、びでんりょう美田良園をつぶしたことも数知れない（中略）せめてこついつ土地を開墾し、農牧の利用に供し、その埋め合わせをするのが国家公共のためではあるまいか。」
その後井上勝は、ある宴席にて日本鉄道会社の副社長であつた小野義真と、当時の三菱社の社長であつた岩崎弥之助に向かつてその思いを伝えたところ、岩崎がその場で出資を承諾し、その地に広大な農場を作ることが即決されたといふ。こつとして、小野、岩崎、井上の頭文字を冠した「小岩井農場」なる広大な農場がかの地に作られることとなつたのであつた。

——我々はともすれば、先人達が何を残したのかに目を奪われ、その裏で彼らがいかなる精神を携えていたのかを見過ごしてしまふ。しかし、先人達が何を感じ、如何に悩み、どう生きたのかといふこと以上に我々が学ぶべきことなど何も無いのかもしれない。井上勝のこの一つの小さな逸話は、そうした当たり前のこと

を思い出さず、かけを我々に与えてくれているのかもしれない。

すみやかなすみやかなばんぼふてん万法流転のなかに
小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
いかにも確かにけいき継起するといふことが
どんなに新鮮な奇蹟だらう
(『春と修羅』所収 『小岩井農場』より)

岩手県の詩人・宮沢賢治が、小岩井農場の美しさを歌った詩の一部。彼は、一人の土木屋の思いでつくられたその農場を、その美しさ故にこよなく愛したという。